
連理木の下で～澄明の空～

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連理木の下で〜澄明の空〜

【Nコード】

N0918Z

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

鷹子は紅椿の下で傷だらけの「椿」と名乗る青年を見つけた。屈託ない鷹子に、椿はしだいに心ほどこいていく。そして彼女は彼の背負った過去を知ること——。

2011年コバルトノベル大賞一次通過作品です

序（前書き）

平安時代をベースにしておりますが、基本ファンタジーとして読んで頂ければさいわいです。

前回の『螺旋階段の終わり』と違い、今回は投稿した時のものをそっくりそのまま掲載してます。

原稿用紙換算で104枚程度です。

序

影は息を殺し、邸やしきを囲う築地塀ついでいに張りついていた。東の総門には数人の屈強な男が仁王立ちしており、門の両側に爆ぜる篝火が彼らの強面を照らす。

夜闇が、ざわりと動いた。人影は地面を蹴り上げ、そのまま男達を押しつけ総門を突破した。

「何奴だ！」

「まてっ」

影は寢殿と東対とをつなぐ渡殿の下にうまく身を滑り込ませて男達の追跡を退けた。肩で小さく息を吐き、影は己の目の前を通り過ぎて行く者達の合間から様子をうかがう。

「まだだ、まだお館様やかたは生きておられる！ 絶対にお守りするのだ！」

郎従達が勇み戦う声が聞こえてくる。

「貴様、ここで何をしているっ」

影の前に一人の武士が立ちはだかった。武士は携えた刀を振り上げる。

「覚——」

声は最後まで続かなかった。影の太刀が武士の鎧を貫通し、心臓を突き破ったのだ。無言のまま武士は崩れ伏す。渡殿の下から這い出した影は武士から太刀を引き抜くと、母屋へ向かう。母屋の蔀戸の前に置かれた几帳は見るも無惨に乱されていた。燈台の光に浮かぶ血の飛び散った襖障子、金屏風。ひっくり返った火桶の灰をかぶって倒れている女達。動くものはない。影はそれを確認すると、母屋の横にある塗籠ぬりこめへ向かった。妻戸を開け放ち、暗闇の先に目をこらす。視線の先にいたのは壮年の男。がらくたや宝物の間にうずくまっている男の息はひどく荒い。

「父上。あなたともあるう方が、憐れな」

影の声はひどく無機質で、抑揚がなかった。

「……………」

男は影の名を呼ぶが、声がかすれて聞き取れない。

影は太刀で壮年の男へ近寄ると、身をかがめて男を抱き起こした。妻戸越しに洩れる微かな月明かりに照らされて影の顔が露わとなる。美貌の青年が、そこにいた。

「わが、妻……………」

「母屋で死んでおりました。おそらくは、自刃かと」

「そう、か……………」

美麗な顔を寸毫たりとも乱さない青年へ、男は一本の太刀を差し出した。その目には涙がある。

「……………」これを……………おまえに、託す……………」

青年は表情を僅かばかり動かす。男は半ば無理矢理それを青年の手に握らせた。

「……………」逃げる……………。そして……………仇を……………」

風を切る音がしたと思ったら、一本の矢が飛んできて男を射貫いた。こうなることはわかっていたとばかりに、壮年の男は静かに瞑目する。男の手が青年の手より滑り落ちる。

同時に、わっと大音声を上げて数多の武士が塗籠へと乗り込んできた。

「まだ生きている者があるぞ！ 殺せ！」

「まで！ そいつは……………」

青年を殺そうと意気込む血気盛んな武者を、他の者が制した。ゆるりと青年が片膝について立ち上がった。彼の瞳孔が開く。彼の顔を見た武士達は息を呑んだ。

「お……………臆するな、奴は一人だ」

じりじりと武士達が青年との距離を詰めてくる。牽制も込めて矢を飛ばしてきた。鍔は青年の高く結わえた髪に当たった。髪紐がずるりと外れ、後ろ髪が宙を舞って床に落ちる。青年は己の髪が散つ

たことに頓着するでもなく、太刀を一気に抜いて薙いだ。最前列にいた武士が手に持っていた松明が揺らぎ、落ちる。

——それが開戦の合図となった。

熱気が立ち込める邸内の外で、雪が舞い始める。南庭に植えられた椿がぽとりと果てた。炎に燃え上がる館と雪。正反対のものが同時に存在するさまは、幻想的であつた。

地表に張った氷を思いきり踏めば、ぱりんと冴えた音を立てて碎け散つた。

少女は一心不乱に走っていた。小さな足でひたすら逃げる。水溜まりと薄氷が地面を覆っていた。多量の水気を内包した雪に藁靴がはまって抜けなくなる。少女はそれを脱ぎ捨て、裸足となって駆けだ。地面に落ちている木の枝や小石が少女の足の裏を引っ搔く。真つ赤な紅葉の如く素足が赤まる。

足がもつれ、少女は倒れた。風がうなり声を上げて渦を巻く。ちらちらと優しく舞っていたはずの雪は、いつの間にか吹雪き始めた。歯の根をかちかちと打ち鳴らす。むき出しの手足が鳥肌立つ。少女の目から涙がこぼれ落ちる。彼女はそれを小さな両手で拭った。しかし、それは次から次へ落ちてきて止まらない。

少女は空を仰いだ。一羽の鷹が、雪雲に覆われた夜明け空の中、力強く翼を広げている。

「……っ」

青白く輝く雪に爪を立てて少女はむせび泣いた。頼りない小さな背中が白い雪に覆われ、霞んだ。

夜が残る明け方——暁が来る一步手前の霊峰・郷愁山は静かだった。空には薄く紗がかかった闇と星明かりだけがある。

そんな山の一角で、一人の少女がキノコを採ろうと手を伸ばした格好のまま固まっていた。少女は肩甲骨辺りまで伸ばした薄茶の髪を揺らす。彼女はくりくりとした薄茶の瞳を数度瞬かせて手の甲で擦った。

紅椿の連理木のもとで、青年が身を投げ出していた。黒糸でつなぎ合わせた鎧は外れかかり、籠手や脛当などの小具足はひしゃげている。沓に至っては底が抜けて合間から足袋が覗いていた。腰には大ぶりの太刀を二本穿いている。……右肩には矢が刺さっていた。漆黒の髪は肩につかない程に短く、涼しげな顔には生気が感じられない。今にも消えそうな顔を、星々が頼りなげに照らしている。

少女は小首を傾げ、膝小僧を抱えて青年を見つめた。

「——誰だ」

死んでいるようにも見えた青年は生きていたようで、身じろぎする。すっと切れ長の目が開いた。黒曜石を磨き上げたような濃い黒色が少女を射る。苦しそうに奥歯を噛みながら青年は刀の柄を握る。次の瞬間、ごぼりと嫌な音がしたと思ったら彼の口から多量の血が溢れた。

「大丈夫だよ。あたし、何もしないよ」

少女は青年を安心させるように、にっこりと笑いかける。青年は不審げにそれを見、柄から手を離れた。

彼は己の右肩に刺さった矢を握りしめると、一気に引き抜いた。血しぶきが上がり、地面が真っ赤に染まる。引き抜いた鏃からは腐った肉のにおいがした。

少女は青年の頭上にある椿の葉を、つま先立ちして引き千切った。

彼女は背負っていた竹かごを下ろし、木の器を取り出した。彼女は器へ椿の葉を入れ、石ですり潰す。

少女の行動を怪訝な顔で見守る青年へ、少女は器を突き出した。「椿の葉の汁は止血薬になる。お水もあげるから、傷口を洗い流してから塗って」

「……………」

青年はいるともいらないとも言わず、少女から視線を外した。

「……その肩の傷を放って置いたら、腕が腐り落ちちゃうよ。せめて水でさらさないと」

少女は心配そうに言い、竹筒を差し出す。

「ここに置いておくね」

何も言わない青年に少女はそう言い、すつくと立ち上がると、軽やかな足取りで場を去った。

青年は少女の置いていったものをまじまじと見つめていたが、やがてゆるりと瞑目する。右肩からは多量の血が止まることなく流れ続ける。

翌日の昼下がり。太陽の日差しが木々の隙間より差し込む。溶け残る雪は太陽の下で青い光を放っている。青年は二本の椿の樹木が絡み合った連理木にもたれかかっていた。そんな彼を、猛禽類特有の鋭い目をした鷹が樹上から見下ろしている。

少女は青年の傍に果物や握り飯を置いた。青年は何の反応も示さない。少女はしゅんと俯く。

「血止め……………」

青年が躊躇したように言葉を切ると、少女は顔を上げた。

「よく効いた」

その言葉を聞いた瞬間、少女の顔に笑顔が浮かぶ。

「うんっ」と心底嬉しそうに答える少女へ青年は怜悧な美貌を向け、押し黙る。

少女は青年から少し距離を置いたところに尻をついた。地面は雪

解け水で濡れている。近寄るなとも離れろとも言われないので、そのまま曇り空を眺める。

少女はおずおずと青年へ声をかける。

「あたし、鷹子^{たかこ}って言うの」

少女は、きらきらと輝く瞳で名乗った。青年は微かに目を見開いた。

「……女で、名に 鷹 がつくなど……珍しいな」

へへ、と鷹子は鼻をこする。

「死んだおつとつとおつかあがつけてくれたんだ。鷹のように自由に……何者にも囚われず生きられるようにって」

「……………」

「あなたは何て名前？」

名前を問われた青年は視線をさまよわせる。その時、ぽとりと紅椿の花が彼の目の前に落下した。

「——椿」

青年はそう答えた。鷹子は笑顔を浮かべる。

「椿様、椿様」

彼女は口の中で彼の名前を反芻する。その顔はひどく嬉しそうだ。

「ねえ、椿様は寒くないの？」

鷹子は訊ねながら、鼻を嚙った。つんと張り詰めた冷たい空気がここにはある。

「寒ければ、来なければいいだろう」と、椿はにべもなく言い放った。

それでは答えになっていないじゃないかと鷹子は口を尖らせる。

椿は彼女の相手をするのは億劫だと言いたげに嘆息した。愁いを帯びた黒い瞳が前髪によって隠れる。

「ここに、ずっといる気なの？」

「……………」

「危ないよ。この時期はいきなり雪崩れとか起きるし、そうでなくともこの寒さじゃ凍えちゃう」

椿はそつぽを向いたまま何も答えない。もう、と鷹子は頬を膨らませる。

「あたしこの山にあるお寺に厄介になつてゐるんだ。良かったら、あなたも」

返事はない。

「――また来るね」

うんともすんとも言わない椿に鷹子はそう言い残し、山の中腹へ向かう。細い木々が立ち並ぶ道を通り抜ければそこには堂々とそびえ立つ一枚の巨石があった。巨石の前には寺が存在する。風雨の浸食によつて今にも腐り落ちそうな屋根が何とも言えない。

その寺は、郷愁寺きょうしゅうじと呼ばれており、巨石の奥に安置されている靈石――ご神体を祀っている。

砂利が敷き詰められた寺の敷地内へ入ると、入り口部分を掃いていた僧侶と目があつた。僧侶は軽く笑い、本堂の方を顎でしゃくる。

「おう。夕飯の用意、出来てるぜ」

「はい」

僧侶達と共に本堂で夕餉を食べ終わり、腹を擦りながら自室へ戻ろうとしていた鷹子の耳に、穏やかならぬ雨だれの音が届いた。年季が入った天井はみしみしと嫌な音を立て雨漏りしている。

「あーあー、降り出しちまつた」

「おい。桶を持ってきてくれ」

僧侶達が早歩きで簀子を行き交っている。鷹子はそつと障子を開けて外を眺める。天をひっくり返したような土砂降りの雨が地表を打っていた。

「いやあ、久方ぶりにひどい降り方だ。この分じゃ、雪崩れや土砂崩れが来るかもな」

びしょ濡れの僧侶が、がなるのが聞こえてきた。

鷹子の脳裏に、椎の木の下で出会った青年の姿が過ぎる。彼女はしばし逡巡していたが、小さく頷くと自室へ戻って使い古しの笠を

着た。僧侶達に見つからないよう気をつけながら、彼女は寺を飛び出した。

山の中は雨で地盤が緩んでおり、いつ雪崩れや土砂崩れが来てもおかしくない状況だった。鷹子は息絶え絶えに走る。

椿は葉から伝ってくる雨粒を避けようとせず、連理木にもたれかかっていた。遠くに思いを馳せる黒い眼には虚無が漂っている。激しい雨によって紅椿の花が首からもげ、辺り一面汚らしく散らばっていた。がさり、と草を揺らして鷹子は青年の前に立った。

「……お前……」

「一緒に、お寺へ行こう！」

雨音にかき消されぬよう、鷹子は叫んだ。椿は首を横に振る。

「——いい」

「でも……このままじゃっ」

だんまりを決め込み、椿は顔を背ける。鷹子は必死に彼の手を引いた。椿の眉間に皺が寄る。

「くどいっ！」

「！」

鷹子の手を椿が払いのけた瞬間、鷹子の足がよろめいた。彼女の後ろ側は急斜面となっている。鷹子は反射的に目を瞑った。

鷹子の体に強い力が加わる。薄く目を開けると、そこには椿の首筋があつた。転がり落ちそうになった鷹子を、椿が助けてくれたのだ。そんな彼の右腕を鷹子はむんずと掴んだ。彼は痛みを堪えるように、渋面を作る。

「離せ」

「いやだ」

「………傷が開く」

「お願い。危ないから、一緒に来てっ」

「……お前の方が危なかったじゃないか」

「お願い」

「………」

腕を掴んだまま懇願する鷹子の頑固さに折れたのか、椿は首肯した。

土砂降りの中、二つの影が郷愁寺に蠢いていた。影達は裏口より寺内に侵入する。

椿は苦しそうに咳をした。鷹子は彼に肩を貸しつつ、障子を足で器用に開けた。

鷹子の部屋は、納戸である。土壁を巡らせた納戸には光が射さない。鷹子は隅に寄せた燈台に火打ち石で明かりを灯し、ついでに火桶にも火をつける。じんわりとした暖かさが室内に広がった。

椿は崩れ込むようにあぐらをかいた。彼は水分を含んで重くなった防具類を外すと、ゆがけと足袋を脱いで小袖姿となる。

鷹子は床に散らばった薬草や花、器などを端へ押しやると、竹で編んだ敷物を叩いた。

「ここ、使つて下さい」

椿は無言のまま室内を見回すと、鼻を鳴らす。

「そんな古びた寢床、いらん」

「え、でも——」

「俺はここで良い」

彼は壁際にもたれて腕を組んだ。

鷹子は恐縮しつつも寢床に潜り込んだ。

「……ところで、ここはどこだ？」

椿が訊ねてきた。

「へ、ここは郷愁山にある郷愁寺で——」

「そのようなことを聞いているのではない。この国の名は？」

「下野国だよ。下野国の、足利郡」

足利だと、と椿の眉尻がつり上がる。

「うん。けど、ここはすごーくへきちだから、あんまり重要視されてないんだって」

鷹子は障子に映る自分の影で影絵遊びをしながら答えた。

足利か、と椿はつぶやき鼻を鳴らす。

「随分逃げたつもりだったが……そうでもなかったな」

ほどなくして、椿は寝息を立て始めた。鷹子は自分がかぶっていた掛け物を椿にかけ、火桶を彼の傍に寄せてやった。彼女は敷物の上で丸まって、眠りについた。

鷹子が深く寝入った頃、椿の目が開いた。彼は自分にかぶせてあった掛け物と、傍に置かれた火桶を見る。椿は鷹子に視線をやると身じろぎし、そのあどけない寝顔を見つめ、そっと掛け物を鷹子へかぶせ返した。火桶も鷹子の足許近くへずらす。

燈台の光がちりちりと小さな音を立てて消えた。

雨上がりのにおいがする。鷹子は鼻をひくつかせながら薄く目を開けて驚いた。椿にかけてやったはずの掛け物が、自分の上にあるではないか。がばりと跳ね起き、きよろきよろと周囲を見渡す。

椿は壁にもたれて目を瞑っている。鷹子は彼がここにいることに安堵の溜め息を洩らす。椿ははうつすらと目を開けた。

「おはよう」

「……………ああ……………」

頭を押さえながら起き上がろうとする椿を鷹子は止めた。

「まだ寝てていいよ。けが人なんだし」

「——お前に世話になるつもりはない」

「でも——」

「鷹子！」

すぱんつ、と襖が開いて室内へ数人の男が入ってきた。彼らは揃いも揃って法衣を着崩している。両腕には数珠を巻きつけており、錫杖を無造作に握っていた。寺の僧侶と言つより、山法師と言った方が正しいような出で立ちである。

太眉の僧侶が片目を瞑って凄んだ。

「何を寝坊しておるのだ。大体、おまえはなあ……」

はた、と僧侶の言葉が止まる。鷹子は彼の視線の先を辿った。僧侶達の視線は、鷹子の後ろにいる椿へ向いている。注目されている当の本人は気にする様子もなく、前髪を掻き上げた。

「誰じゃ、貴様！」

「くせ者だ、皆の者であえ、であえー！」

「あ……………」

あつという間に僧侶達が納戸に集まってくる。厳めしい顔をして、がに股で椿に近寄ろうとする僧侶達を、鷹子は両手を広げて遮断した。

「この寺内へ、勝手によそ者を入れるなど……馬鹿者！」

つばをまき散らして僧侶が喚く。

鷹子は首を竦めながらも、僧侶達の前を退こうとしない。

「そこをどけ、鷹子」

「いや」

「こんな時ぐらい言うことを聞けっ」

「絶対いや」

「もういい。こうなったら無理矢理——」

「おやめなさい」

鷹子の首根っこを掴もうとした僧侶を、凜とした声が止めた。

「驚幸様！」
おつこう

鷹子の声色が明るく弾んだ。

驚幸は瞼を閉じたまま、にこりと微笑んだ。その邪気のない微笑は神仏を思わせる。

「驚幸様、お下がりがくださいませ。鷹子の引き入れた不審者が中に……………」

僧侶達の言葉に答えず、驚幸は椿の前に進み出た。

「君は旅人でしょうか」

驚幸は伸びのある心地よい声で椿に問いかけた。椿の眉間に皺が

寄る。

「坊主如きに答える義理などない」

彼が目を眇めて答えると、鶯幸ではなく僧侶達が激しく反応した。
「きさま、我が師の侮辱は許さん。言葉を改めよ」

「改める言葉など一つもない」

「何を！」

僧侶達は殺気立ち、怒りに身を任せて錫杖を振りかざし、椿に殴りかかった。椿は僧侶達の錫杖を太刀の鞘で受け止め、柄に手をやって体勢を低く――。

「やめて！ 椿様は人が人なの！」

鷹子が横から割って入ってきたことで、太刀の抜きどころを失った椿は舌打ちする。

「この荒くれどもが」

彼がそう呟くと、僧侶達は再び錫杖を構えた。

「だから、おやめなさいと言っているでしょう。聞こえませんでしたか」

「も、申し訳ございません」

鶯幸から諫められた僧侶達は不承不承といった様子で身を引いた。鶯幸は椿に対して深々と頭を下げる。

「この者達に代わって非礼をお詫び申し上げます。私は鶯幸。この郷愁寺で和尚をしております。ここにいるのは私の弟子達です」

「弟子……？ このように野蛮な僧兵風情がか」

挑発とは思えない椿の発言に僧侶達の表情が強張る。しかし、鶯幸は眉一つ動かすことなく続ける。

「僧兵などではありません。ただの僧侶です。……そうですね、皆さん」

僧侶達は頬に朱に染め、構えていた拳を下ろした。

「して――君の名は？」

「……………」

「椿様って言うの」

答えない椿に代わって鷹子が答えた。ほう、と鶯幸は頷いた。

「あのね、山の中で倒れていたの。怪我もしているから、ちゃんと手当てをしてあげたくてここへ連れ帰ったの。勝手に連れてきたことは謝ります。ごめんなさい」

「そうでしたか。……しかしまた、何故この山中に倒れていたのでしょうか」

「それは……知らない、けど」

鷹子は鶯幸の法衣をぎゅっと握った。

「ねえ、鶯幸様。あたしがちゃんと面倒見るから、椿様の怪我が治るまで、ここに置いてあげて」

鶯幸にせがむ鷹子を僧侶達が軽く叩いた。

「黙って聞いていれば——駄目に決まっているだろうが」

「そうだそうだ。こんな得体の知れない男を寺に置いておけるかつんだ」

僧侶達の猛反発を喰らうも、鷹子はそれを聞き流して鶯幸に「お願いします」と言い続ける。

鶯幸は嘆息した。

「——仕方がないですね。わかりました」
「やったあ」

鷹子は諸手を上げて喜びを表現し、反対に僧侶達は肩を落として落胆を表現する。

「怪我が治るまで、どうぞ心置きなく滞在して下さい。……鷹子、ちゃんと君が面倒を見るんですよ」

「はいっ」

言い含める鶯幸に、鷹子は大きく首肯した。

「そんな……っ」

「おい鷹子、オレ達は手伝わねえからな！ あとで泣きついてきても知らねえぞ」

捨て台詞よろしく言い放つ僧侶達に、鷹子は頬を膨らませた。

「いいもん！ ちゃんと一人で面倒見れるもん！」

彼女はそう言ってそっぽを向いた。何を、と僧侶が鷹子に詰め寄る。鷹子と僧侶達は言い合いを始めた。

じつと腕を組んでことの成り行きを静観していた椿は身じろいだ。「……勝手に話を進めるな。俺はここにはとどまらな——」

「先ほど弟子達とやり合った時に傷口が開いたのではないですか」

驚幸の囁きに、椿は言葉を止めた。

驚幸は両指を交差させる。

「目が見えないと、感覚が研ぎ澄まされるものです」

「……………」

「いいではないですか。怪我が治るまでゆっくりしていけばいい」

「……………好きにしろ」

椿はぱっくり割れた右肩の傷口から染み出す血を押さえつけた。僧侶との言い合いが一段落したのか、鷹子が椿に近づいてくる。

「椿様、良かったね」

その笑顔は微かな媚びも企みもない、真心だけが感じられるものだった。

二

郷愁山を覆っていた雪はすっかり溶解し、山桜がいつせいに身をくゆらせて美しい花びらを散らす。枯れ枝からは黄緑色の芽吹き、瞬く間に大ぶりの葉が生い茂る。その山の中腹辺りにひっそりと佇む郷愁寺。鷹子は南の客間へ向かっていた。客間の周囲は静まり返っている。ひたひたと自分の足音だけが反響する。

客間の襖を開けた彼女はひょっこりと室内を覗いた。部屋の隅に、掛け物を頭からかぶった椿の姿があった。

「……いつてきます！」

鷹子は、襖を閉めながら小さく——しかし、元氣良く言った。

「……………」

威勢の良い鷹子の足音が遠ざかったのを確認し、椿は上半身を起こした。乱れた髪を手ぐしで整えて枕元に置いていた着替えに袖を通す。

あれから一月。一人で外出できるまでに回復したものの、突如襲ってくる右肩や脇腹の痛み、頭のすみがぼんやりと霞がかったような倦怠感に、いまだ椿は悩まされていた。

とりあえず水でも飲もうと井戸へ向かうことにして部屋を出た椿だったが、井戸に着く一歩手前でびたりと足を止めた。井戸付近に僧侶達がたむろっていたのだ。釣瓶桶を井戸の中に放り込んでいる者、岩肌に動物や仏の顔を刻む者達が談笑している。あの輪に入るわけがない。

仕方がないので、椿は寺を出た。

藪を掻き分けて進むと、大岩壁を断ち切るように落下する滝に着いた。椿はその滝のもとに広がる泉のふちに腰を下ろす。激しい水压を誇る滝が、朝陽を受けて黄金色に乱反射しながら飛沫をあげる。椿はその澄んだ水を掬い上げ、存分に喉を潤した。

「お前……」

後ろを見やると、ごつごつした岩場に高下駄なんぞ不安定なもので佇む僧侶達の姿があった。彼らはこれでもかと言うくらい顔を顰めている。これから滝行をおこなうのか、衣がいつもと違った。

椿は僧侶達に向き直る。

「な、なんだよ。やるか？」

「愛想の一つくらい見せたらどうだ！」

「うるさい」

低く言う椿に僧侶達は顔をひくつかせた。椿は見事な足捌きでその場を去ろうとした。

「良いご身分だな、あんた」

「貴様の食しているものは全部、仕事の合間を縫って鷹子が一人で探してきてるつてのに！」

びたりと椿の足が止まる。

「我らの寺に備蓄はない。己の食い物は己で集めるのが、寺に居候する者の決まり。材料を用意出来ぬ者は炊き出しにありつけぬ」

「加え、寺の掃除を行なったり、山神への献上品も用意しなければならん。それがどれだけ大変なことか、お主にはわかるまい」

「わしらは貴様のために食べ物を分け与えるなど生優しいことはせぬぞ。はよう寺から去れ！」

僧侶達はそう吐き捨てて大股で滝壺へ向かう。彼らの後ろ姿を無表情のまま見つめる椿の顔が、波立つ水面に映っていた。

夕陽が山間に沈んでいく。床板をぎしぎし鳴らし、とて、と軽い足音を立てて少女は客間の襖を勢いよく開け放った。少女——鷹子は泥まみれの顔を腕で拭う。

「ごめんなさい、遅くなっちゃって。お腹すいたでしょ？」

鷹子はそう言って高坏にのせた食事を運んできた。雑穀米に漬物、山の幸を煮詰めた汁に加え、笹の葉にくるんだキノコ類と胡桃の炙り物まで添えてある。

鷹子は当たり前のように椿の横に座り、食前感謝の言葉を呟くと小さな二つの握り飯に食らいついた。小さな握り飯はすぐ消える。椿は箸を止めて彼女を観察していた。やせぎすの少女は物足りなさそうな顔をして、指にこびりついた米粒を舐め取った。

「……………食うか？」

「あ、あたしは大丈夫だから。さっき、たらふく食べたの」

鷹子は椿の申し出を断る。しかし、言葉に反して彼女の腹の虫が鳴った。

「あまり食欲が沸いていないんだ。…………ほら」

「食欲沸かなくても食べなくちゃ。怪我の治りが遅くなっちゃう」

鷹子は頑として膳を受け取ろうとしない。

椿の脳裏に、僧侶が吐き捨てた言葉が過ぎる。

『貴様の食しているものは全部、仕事の合間を縫って鷹子が一人で探してきてるつてのに！』

鷹子が見守る中、椿は完食して箸を置いた。

「ごちそうさま」

「はい」

食べ終えた膳を抱え、鷹子は部屋を出て行こうとする。椿はぽつりと呟いた。

「……………明日は俺も、食い物探しに付き合っ」

「あ——」

ただし、と勢い込んで頭を下げようとする鷹子を制す。

「俺は山菜と毒草の見分け方など知らんからな」

「大丈夫、ちゃんと教えます！　じゃあ、また明日ね！」

足取り軽く部屋を後にする鷹子を見送りながら椿は鼻を鳴らした。

翌朝、椿と鷹子は竹かごを背負って郷愁山の中にいた。椿は木の根に生えたキノコをむしり、首を捻る。

「あ、それは食べられるやつ」

キノコの形を見て鷹子が言つと、椿はすぐ様それを竹かごへ放り込んだ。椿と鷹子の竹かごには既に薬草や山菜がたくさん詰まっていた。太陽が顔を覗かせる前から山に入ったのだ。これくらい採取出来て当たり前である。

椿は折り重なる木々の葉を見上げ、目を細めた。木漏れ日がじわりと肌に染み込んでくる。山の中には風光明媚な景觀が広がっていた。豊かに実った山の幸、澄んだ水、元気に駆け回る動物達。

「こんなに実り豊かならば、麓の村は飢え知らずだろうな」

思ったことを口にした途端、鷹子の表情が曇った。

「村は貧しいよ。村の人達は山へ立ち入ろうとしないから。……呪われてるからって」

「呪われている？」

うん、と鷹子は悲しげに頷く。

「三年前に鶯幸様がおんぼろだったあのお寺に住み着くまで、この山は禿げ山だったの。それがだんだん緑の山に変わっていった。だから、村の人達は何か恐ろしいことを鶯幸様達がしたんだって言う。郷愁山を呪ったんだって」

「馬鹿な……」

鷹子は不服げに唇を引き結んだ。

「ここらは外部から人が来ることが少ないから、閉鎖的な考えが根付いてるんだってお弟子さん達が言ってた。……へんなの」

「そう、か」

「あ！ うぐいす！」

沈んでいたと思ったら、表情を明るくして駆けて行く。つたない歌声が野の花を揺らした。鷹子は竹かごの重さなど微塵も感じさせない軽やかさで、裸足であっちへこっちへ飛び跳ねていた。彼女は、いとけない笑顔を椿へ向ける。

太陽がちょうど中天に昇る頃、椿と鷹子は郷愁寺へ戻ってきた。

「椿様のおかげで、随分たくさん収穫出来たよ。ありがとうっ」

椿は「ああ」と短く答える。

本堂の簀子では鶯幸や僧侶達が話に興じていた。鶯幸は気配を感じたのだろう、こちらに向かって手を振る。

「鶯幸様、お弟子さん達、ただいま！」

鷹子は鶯幸達に向かって走り出した。と、ぼろりと鷹子の竹かごから木の実がこぼれた。椿はその行方を追う。

てん、てん、と木の実は転がる。それは何者かの足許で止まった。その人物はゆつくりと鷹子が落とした木の実を拾う。

「おいしそうな木の実だね」

落ち着いた声音で青年は言った。彼は焦げ茶の長髪を高い位置で束ねている。髪と同色の垂れ気味な瞳が柔和さを醸し出していた。

「あ……っ」

青年の方を不審げに振り返った鷹子の顔つきが変わる。寄っていた眉を下げ、彼女は無邪気に微笑んだ。

椿は青年の格好をざっと確認する。年の頃は二十過ぎくらいだろう。彼は上等な生地で作られた薄色の直垂姿——十中八九、武士だ。

「一年ぶりかな………久しぶり」

「久しぶり！ 京へ行つたと聞いてたけど、帰ってきたんだね」

「うん。足利様に頼まれた仕事が終わったから、こちらへ直行したんだよ。久々にゆつくり出来そうだ」

「本当？ だったら、また剣の稽古つけて下さいっ」

「はは、おまえは本当に男勝りだね」

鷹子と青年が親しげに喋っているのを、鶯幸や僧侶達は遠巻きに見ている。

「おや……この者は？」

青年が椿に気付き、鷹子に訊ねる。

「椿様って言うの。このお寺に居留してるんだ。優しいんだよ。今

日もね、山菜集めを手伝ってくれたの」

「へえ。わたしは嘉納則宗かのつねむねと言う。ここら一帯の地域を足利さまから任されている者だ」

則宗は親しげに名乗ってきた。椿の瞳孔が開く。則宗は手を差し出し、強引に椿の手を握った。思いのほか力を込めて握られる。

「ぜひ、鷹子と仲良くしてやってくれ」

焦げ茶の双眸が底光りした。

「……鶯幸、鷹子を借りてもいいだろうか」

「鷹子が良いのならば、かまいませんよ」

「ああ。では、久方ぶりに散歩でもするとしよう。いいな、鷹子」

鷹子は則宗の言葉に頷いた。そして彼女は竹かごを鶯幸のところへ持つて行く。

「今日はたくさん採ってきたよ」

「頑張りましたね」

「椿様が手伝ってくれたから」

鶯幸に頭を撫でられながら、嬉しそうに鷹子は目を瞑った。

「鷹子」と則宗が呼びかけた。鷹子は慌てて彼のもとへ行く。

則宗は冷たい視線で鶯幸達を見ている。……侮蔑とも取れるような。則宗が鷹子を連れて去った後、僧侶達は「けつ」と毒吐き、つばを吐いた。

「駄目ですよ。はしたない」

弟子を戒める鶯幸も、どこか複雑そうな顔をしていた。

「鶯幸様。俺やっぱり、あいつ……虫が好かねえ」

「あのオレ達を見下した目。癩に障る」

「落ち着きなさい」

椿はそんな彼らの応酬を聞きながら、竹かごを背から下ろした。

「あのお方、君から見てどう見えましたか？」

鶯幸に問われ、椿は顎を引く。

「……どうも何も——」

どう表現していいのかわからず、椿は言葉を切った。彼の瞳の奥

に宿る炎が燦る。

則宗が馬を山と村との境目に置いてきたというので、そこを目的に定めつつ鷹子達は山中を散策していた。

「椿はどのような人物なんだい？」

「椿様はねえ、本当はとてもいい人なの」

「いい人？」

鷹子は則宗を見上げながら首肯する。

「あまり自分から喋ろうとしないから、誤解されるんだろうけど。

あたしがお腹を空かせてたら自分のをくれようとしたし、一緒に山菜採りしてくれたし……」

椿の良さが則宗へ伝わるよう鷹子は心を砕いて言の葉を連ねた。

「——椿というのは偽名だろう？ 間違いなく、あれは武士。真名

や身分を言わない者が、いい人なわけじゃないか」

「……誰にだって、言いたくないことはあるから。きっと、椿様だってもう少ししたら本当のこと言ってくれるはずだもん」

則宗は自分のうなじに手をやり、遠くを見つめた。

「ねえ、鷹子。寺にいたら、ますます村の人達から嫌われてしまう
と前から言ってるだろう。……嘉納家へおいで」

鷹子は足を止めた。

「わたしのところに来れば、何不自由なく暮らせるし、村人達から嫌がらせも受けなくて済む」

「……どうして、そんなこと言っの？」

鷹子は唇を戦慄かせた。

「え？」

「則宗様も、村の人達みたい……鶯幸様や皆が嫌いななの？」

「いや——そんなことはない。でも、あの椿という得体の知れない者を置いている寺に、これ以上鷹子を置いておきたくないんだ。わかってくれるね」

則宗は鷹子の両肩に手を置く。鷹子が首を横に振ると、則宗は失望した表情を浮かべた。

「ごめんなさい。お寺を出て行くことは出来ない」

「……………どうして？」

「あたし、鶯幸様や皆が大好きなんだ。それと——」

鷹子は言葉を切り、強い輝きを放つ瞳を則宗に向けた。

「椿様を見つけたのは、あたしなの。あたしが鶯幸様に、椿様をお寺へ置いてくださって頼んだの。だからあの人のことを悪く言わないで」

真剣な鷹子の瞳を受けた則宗は長い睫毛を伏せる。

「そう……………わかった」

「うん」

理解してもらえたのだと、ほっとした鷹子は顔を綻ばせた。すつと則宗は双眸を前に向けた。彼の瞳は限りなく冷えていた。

数日後の昼、鶯幸の部屋からは明るい笑い声が聞こえていた。

薬湯を煎じている鶯幸の横で、鷹子もそれを真似て薬湯を煎じている。鶯幸の煎じている薬湯は、熱を出した村の子供に渡すものらしい。僧侶達は村人から忌避されながらも、たびたび村へ行つて様子を聞いているのだ。

「おいおい、鷹子。オマエ雑だなあ」

二人の横で、修行の休憩中である太眉の僧侶が茶々を入れる。和気藹々とした彼らから少し離れた壁際で、椿は胡座をかいてま

どろんでいた。薬草をつぶすまでは手伝ったのが、後は自分一人でやると鷹子に言われてしまい、手持ちぶさたとなった彼は物置から兵法書を何編か持ってきて読み漁っていた。しかし、文字を追っていくと眠くなるものである。いつの間にか兵法書を膝の上に置いてうつらうつらしていた。

「椿様、椿様」

鈴の鳴ったような声にはっとして午睡から目覚める。寝ぼけ眼の椿に鷹子は何かを差し出した。一瞬、何を差し出されているのかわからず反応に困ったが、すぐに状況を把握する。鷹子が煎じていた薬湯だ。

「……………これを、俺に……………？」

「うんっ。椿様にも思っ作ったの。早くけがが治りますように」

鷹子は歯を見せて笑った。くりくりした大きな瞳が細まる。

それを見守る鶯幸や僧侶は頷き合った。

「あ、鶯幸様！ あたし、村の子供に薬湯持って行く」

「本当ですか。助かります」

「うん。いつてきます」

つむじ風よろしく鷹子は薬湯を手に山を下りる。鷹子の姿が全く見えなくなった時、太眉の僧侶が呟く。

「おい、椿。ありがとうな」

「……………？」

僧侶は鼻の頭を掻いた。

「あいつはあんまり人に懐かない。おれらと喋ってくれるようになってたのも、最近になってからだし」

「——あの子には、信じられる大人がいませんでしたからね。しょうがない」

そう言う鶯幸の目元が暗くなる。

「……………気になっていたのだが」

椿は神妙な顔つきで言った。

「ん？ なんだ？」

「あいつ、親がいらないと言っていた……飢饉か何かで？」

「いいえ。母親は心の病で。父親は九年前に殺されたらしいです」
鶯幸の答えに、椿の唾を呑み込んだ。

「――殺された？」

「はい、この地域一帯を領主殿に任された、嘉納の前当主にね」
「何故」

「前当主の暗殺を企て返り討ちにあった、というのがもっぱらの噂です。噂は、噂でしかありませんが。そのせいで母親も心労に倒れたと鶯子が言っていました」

「全て、伝聞なのか」

「私達がこの山にやって来たのは三年前。それ以前に起こった出来事なので、詳細はわかりません」

「ふん……嘉納、か。……いけ好かん」

椿は腕を組んで鼻を鳴らした。

「だろ？ おまえ、意外とわかるじゃねえか」

僧侶は深く頷く。

「……しかし、そんなことがあったにも関わらず嘉納則宗と親しくしているとは――何とも妙な話だな」

「おお、それはおれも常々思っていた」

椿の言葉に、太眉の僧侶もそれに同意を示した。鶯幸は手にした数珠を擦る。

「……鶯子から聞いたことがあります。則宗殿とはその件がある以前から交流があったとか。父親のことで村弾きに遭い始めた後も、彼だけが変わらず接してくれた、と」

「……………」

「鶯子の中では、則宗殿は善人なのです」

しみみりとした雰囲気が流れる。

「あ、鶯子一人じゃ心許ないな……俺、追いかけて来ます」

その重い空気に耐えられなかった僧侶が腰を上げようとしたのを、

椿は押しとどめた。

「おい、何すんだよ」

その問いには答えず、椿は部屋を後にする。

「何だ、何だあ？」

首を捻る僧侶に、鶯幸は笑顔を見せた。

「きつと、彼は鷹子のところへ行く気です」

鶯幸の煎じた薬湯を届けに来たと言うと、村人はそれを素直に受け取った。子供の母親は礼一つ言わず家の妻戸を閉める。この程度、いつものことだ。鷹子は気にするでもなく村の中を歩いていた。

唐突に、後頭部に衝撃が走った。振り向けば村の子供達数人が石を持ってにやにやと笑っていた。子供達は大きな石を思いきり鷹子に向かって投げつける。

「やめてっ」

鷹子は咄嗟にしゃがんで頭を庇った。

「郷愁山へ帰れ！ 鬼っ子！」

子供は純粹で、残酷だ。理由も知らぬまま、大人に倣って鷹子を鬼っ子と呼ぶ。鷹子は彼らの面白がる瞳が何よりも恐ろしかった。

「こら、おやめなさい」

「だって、おっかあ」

「可哀想でしょう」

ちょうど通りかかった子供達の母親は、諫めながらも嘲笑を洩らす。本気で止めようとはしていない。小石や普通の大きさの石が鷹子の腕や足、背中に当たる。泣きそうになるのをじっと耐え、彼女は目を瞑った。

「おい」

凜とした面立ちをした青年が、鷹子達の前に姿を現した。無造作に切った黒髪は陽光を受けて煌めき、切れ長の鋭い瞳と一文字に結ばれた薄い唇が彼の伶俐さを引き立てる。

鷹子はぱつと顔を上げた。

「椿様っ」

「……やめろ」

ここに至っても石を投げつけようと構える子供達に向かって椿が釘を刺す。子供達は、わつと女の後ろに隠れた。

「なにさ。大の男が子供を脅すのかい！」

椿は無言で女を睨みつける。女は臆したのか、そのまま子供達の手を取って背を向けた。

「あの……ありがとう」

「いや」

鷹子の目は自然、女と子供達の後ろ姿を追う。自分にはもう与えられることのない、肉親のぬくもり。彼女の瞳は心細さ故、揺れた。そんな彼女の頭に大きな手が覆い被さった。上目遣いで椿を見れば、彼は小さく頷く。椿が手を置いている部分から、じわりと温かさが広がっていく。やはり、彼は優しいのだ。鷹子は椿の手を握った。椿はそれを、握り返しはしなかったものの、振り払わなかった。

——馬の蹄が遠ざかっていくのが聞こえた。

息をするのも億劫な熱気が立ち籠めていた。緑はいよいよ深くなり、蝉が一瞬の生を主張している。山の中はまだ比較的涼しいものの、寺内は蒸し暑さに包まれていた。僧侶達は滝行や山菜採りをすると云って出払っている。

そうなる**と必然的に**、寺の掃除や食事作りは鷹子がしなければなら**ない**。鷹子は厨くじやへ薪を運び入れていた。薪を抱えているため足許が覚束**ない**。小石に躓いて体勢が崩れる。鷹子の働きぶりを見守っていた椿が咄嗟に手を差し伸べる。彼は鷹子の腹に腕を回し、鷹子が転倒するのを回避した。

「……お前は本当に危なっかしい」

「椿様、ありがとう」

椿は鷹子から手を放すと、肩を竦めた。先程の行動からも窺えるように、椿が右肩に負った矢傷は、ほぼ完治している。

「今日は何が食べたい？」

「………魚が食べたい」

「はい。じゃあ獲ってくるね」

鷹子は厨の土壁に立てかけてあるさお箆を頭に乘せて川へ魚を獲りに行く。

「やあ」

鷹子を見送る椿に、明るく朗らかな声がかかった。振り向くと、そこには焦げ茶色の髪を靡かせる青年——嘉納家当主、嘉納則宗がいた。彼は栗毛の馬に跨がっている。

「……鷹子はいないぞ」

椿が愛想なく言つと、則宗は快活に笑った。

「今日はおまえに用があるのだ。少し、時間をもらえるか」
「断る」

椿は、きつぱりと断つた。則宗の笑顔が深まる。

「今、坊主達はいないのか？」

「……………さあな」

「まあ、いいや」

厨の近くから一步も動こうとしない椿に折れたのか、則宗は下馬した。

「……………おまえ、何者なの？」

「……………」

何も答えない椿に、則宗はくすりと笑った。

「答えられないということは、何かあるんだろ？」

「貴様に言うことなど何もない」

「鷹子と関わらず、さっさとこの地から去れば良いものを——後悔するがいい」

言葉は坦々としているものの、則宗の目には狂気が孕んでいる。

椿は臆することなく彼に対峙した。

「貴様こそ。足利に媚びへつらう小者の分際で俺に楯突いてきたこと……………悔やむなよ」

二人は睨み合う。やがて則宗はその場を去った。彼の背中が見えなくなるのを見届けてから、椿は鷹子がいるであろう川へと向けた。長い年月をかけて形成された奇岩奇石が連なる川の中流に、鷹子はいた。薄茶の短い髪が水しぶきを受けて濡れている。適度に焼けた肌がとびきり元気な彼女によく似合っていた。

視線は川底へ向いている。鷹子は笹を川の流れに沿って構え、魚がかかるのを待っていた。

——魚が笹の上で大きく跳ねた。鷹子はたくし上げていた小袖を下ろし、^{くけひも}紵紐を結び直しながら川から上がる。

「おい」

呼びかけると、鷹子は小首を傾げた。

「あれ、椿様……………どうしてここに？」

「……………別に」

椿はむつつりとし、帰るぞと一言放つ。

「変なのー」

乾いた岩場で濡れた足裏を擦りつけながら椿の後に続く。

「ねえ、見て見て。あたし、ちゃんと魚捕まえたんだ」

「そうか」

「あ、鶯幸様やお弟子さん達には内緒だからねっ。本当はお肉って食べちゃ駄目らしいから」

「……ああ」

椿は鷹子を横目見た。彼の横を歩く鷹子は何が楽しいのか笑っている。両親を亡くし、村弾きに遭い、辛いだろうに。彼女は強く生きている。

椿の脳裏に影が浮かぶ。父親の背中、そして泣き顔。ただの過ぎ去りし出来事だとわかつていながらも、振り払えない。しかし、鷹子を見ているとそれらが霧散する。彼女はまるで、優しいひだまりのようだと椿は思った。

いったん郷愁寺へ戻って夕飯の支度を済ませた後、鷹子は山へ入って薬草を採ると言い出した。椿は何故か彼女に付き合わされていた。

椿はしゃがみ込んだまま、常緑木の合間から見える丸い空を仰いだ。暮れなずむ夕陽が目を射る。

ぴー、ぷー、と鷹子は草笛を吹き鳴らす。それに呼応して夜鳥が鳴いた。草のささめき、匂い立つ清らかな水。現世ならざる神聖な雰囲気があるにはあった。

「……綺麗だ」

景色を眺めと言う椿に、鷹子は「うん」と答えた。

「鶯幸様達が来る以前は、荒れ放題だったから、絶対近づきたくなかった。……鶯幸様は本当すごい」

「随分と、鶯幸を慕っているのだな」

鷹子は首肯する。

「あたしね、おつとうが嘉納様の当主を殺そうとしたんだって村の人達から言われて冷たくされてたの。おっかあも死んじゃって、あたしは一人ぼっちだった。話し相手になつてくれるのは則宗様くらい。そんな時……三年前……鶯幸様と出会ったの」

その時のことを思い出しているのか、鷹子の顔が綻ぶ。

「こっそりお寺に近づいたら、『おいでなさい』って言ってくれてたくさん話をしてくれたし、聞いてくれた。あたしが駄目なことをしたら厳しく叱ってくれた。家族、みたいに」

「……良かったな」

「うん！」

ふっと彼女の顔に影が差す。ついさっきまであかね色の雲が浮かんでいたというのに、いまや空に広がるは満天の星。手を伸ばせば掴めそうだ。藍の空を埋め尽くす星明かりがまぶしい。

「あ、そうだった」

唐突に鷹子は手鼓を打った。彼女は椿の手を引く。

「ちよっとついて来て」

「おい、もう戻らなければ鶯幸達が心配——」

「大丈夫」

強引に鷹子は夜道を進む。木の枝に夜鳥がとまっていた。

「あ、夜鳥の巣から赤ちゃんが顔出してる。かわいいねえ」

「……よく見えるな」

鷹子はかなり夜目が利くのだろう。

二人は獣道を通って拓けた場所へ辿り着いた。椿の連理木が悠然と佇むそこは、椿が倒れていた場所だった。椿の葉が風にそよぎ、その隙間から密集した星が覗いている。

「やっぱり、七夕の季節は星が明るいや」

鷹子に言われてよく見れば、上弦の月の横で星が群れをなし、天の川を作っている。

ここに來たのが如月の終わりで、今が水無月の始め。もう、かれ

これ四ヶ月も経っていた。そんなことまで、椿は忘れていた。

しばし、二人は無言のまま星空を見上げていた。椿の木にもたれかかっていると、倒れていた時の苦しみもまた蘇ってくる。鷹子は血が染み込んでいる木の根元を撫でる。

「ここにいたら、全部遠くにあるような気がしてくるの」

鷹子は独り言のように小さく言った。

「村の人達のいじわるも、おっとうや、おっかあが亡くなったのも……全部ただの悪い夢みたいなんだって気分になれるの」

「……………」

「だからあたし、椿様にもここは素敵な場所なんだよってちゃんと教えてあげたくて。けがが良くなったら連れてってあげようって思ってたんだ」

「……………」

夜風が椿の黒髪をあおった。どこからともなく蛍が舞い始める。

鷹子は勢いつけて立ち上がり、後ろ手を組んだ。

「ここ、昔からあたしの 秘密の場所 でね。へへっ……。鶯幸様にも則宗様にも教えたことないんだよ」

椿は込み上げてきた何かに面食らった。今まで何も感じることもなかった心が胎動する。心地よい静寂の中で鷹子が笑う。

「……………ここが 秘密の場所 で、良かった」

「……………」

「椿様を見つけることが出来たから」

椿の瞳孔が縮まる。息が、止まるかと思った。

椿は惚けた表情を引き締める。

「倒れていた俺を何故、助けた」

「……………だって、椿様が……………」

もによもによと鷹子が手遊びする。

「はつきり言え」

椿は眉間に皺を寄せて腕を組んだ。

「……………夜みたいないな目をしてたから」

「何……？」

「全てがどうでもいいような目をしてたから」

助けなきやつて思ったの、と少女は続けた。

ぱきり、と椿の心を覆っていた氷にヒビが入る。それは瓦解した。

「……………気付いているかもしれないが。俺は都から落ち延びてきた……武士だ」

椿はゆっくりと語り出す。

「半年前、我が家はだまし討ち同然に攻め滅ぼされた」

「え……？」

「仕える主君家の後嗣を巡って他の派閥ともめていたんだ。その時、俺は別の家に仕えていたから……報せが遅れた。夜襲当日に実家が囲まれていると火急の報せを受けて急行したが間に合わなかった。

……邸に攻め込まれた原因は、父が、ある男を信用しすぎたから」

椿は嘲笑を洩らす。

「兄からその男のことは聞いていたから、何度も注意するように父へ手紙を送っていたが返事は来ず——結果、俺の家は滅んだというわけだ」

鷹子は何も言わずに椿の話の話を聞いている。椿は柔らかな草を握りしめ、拳を震わせた。

「いまだ、鮮明に思い出せる。家が囲まれていると火急の報せを受け、駆けつけた時に見た……家人や郎従共の殺された姿。……塗籠で見つけた父の無念の涙」

情けない、と椿は低く呻いた。

「惜しむ価値もない。……父は愚か者だ」

そう罵る椿を鷹子が覗き込んでくる。

「椿様は、おつとくに許して欲しいんでしょう？」

「！」

「ちゃんと止められたら良かった。きつと、そうしていれば救えたかもしれないって、思ってるんでしょ？」

鷹子は涙ぐむ。

「自分だけが逃げて生き延びたことが、辛いんでしょ？」

「ど……………して……………」

椿の声が掠れた。鷹子は座り込んで、両目に手の甲を当てた。

「あたしも一緒だから。椿様の苦しさがちよつとだけわかるの」

「一緒……………」

鷹子は頷き、涙が光る瞳を椿に向けた。

「椿様が自分を許せる時が来るまで、あたしが代わりに椿様のことを許しておくね」

「……………」

「椿様は何も悪くない。あたしはそう思う。これから先、何があったって、そう思う」

一陣の風が吹いた。

「……………馬鹿馬鹿しい……………」

喉から絞り出すように、椿は言った。彼は視線を落とし、ぶら下げていた二本の刀を放り出した。そして、ごろんと横になる。椿に倣って鷹子も寝転がった。彼女は腹の上で手を組んで、じっと空を見ている。

「椿様」

「……………なんだ」

「泣いてるの？」

「泣いてるのは、お前だろう」

椿の目に涙はない。しかし、彼の瞳に映り込む星々がきらきらと波打ち、潤んでいるように見える。

鷹子は手を枕にして、椿の方に向き直った。一筋の涙が頬を横切つて草の先に落ちた。

「泣いてもいいんだよ」

「……………」

怪訝な顔をして椿は鷹子を見やった。鷹子は緩く瞬き、泣きながら笑う。

「驚幸様によく言われるの……………涙には心を和す力が……………あるんだっ

て……」

「……口を開けば鶯幸様、鶯幸様。お前は本当に——」
皆までは言わなかった。鷹子が眠ってしまったことがわかったからだ。

椿は無言で上体を起こすと、鷹子の寝顔を見つめた。月と星々の輝きを受けて照り輝く鷹子は、この世の者と思えなくて。椿は鷹子の柔らかな頬に手を滑らせた。規則正しい寝息が彼の手にかかる。椿は鷹子を、そっと抱え上げた。

鶯幸は部屋の前の簀子に文机を置き、正座のまま姿勢をぴんと張って墨を刷っていた。彼は感覚のみで、流れるように美しい文字を書く。月と星、そして燈台の明かりが鶯幸を照らしていた。彼の耳に砂利を踏みしめる音が届く。鶯幸は顔を上げずに言った。

「遅かったですね」

「——ああ」

「鷹子の足音が聞こえませんでしたか」

「眠っている」

「……………おやおや」

鶯幸は笑みを洩らした。鷹子は椿の腕の中で、健やかな寝息を立てている。椿の横顔には、吹けば飛びそうな淡い微笑が浮かんでいた。

四

早朝、鷹子は滝の下にある泉に群れなし開花する白い蓮はすを、顔を洗うついでに摘んでいた。寺の中に飾ったら僧侶達に怒られるかしらと思いつつも、まあいいかと蓮の匂いを胸一杯吸い込んで、ふわりと笑う。

と、馬の蹄の音がした。鷹子は耳を澄ます。一頭だけならば則宗だろうが、今通ったのは複数だった。

いやな予感がする。

鷹子は花を抱えて郷愁寺へ急いだ。急な石段をのぼり、草陰に隠れる。寺の境内には則宗がいた。郎従達も連れている。本堂の前で、何やら驚幸と話しているようだった。いつもなら気兼ねなく声をかけるのだが、辺りを漂う不穏な雰囲気、鷹子は二の足を踏んだ。

「んっ」

いきなり背後から口を塞がれた。その拍子に蓮の花を取り落とし、てしまった。

足をばたつかせて抵抗するも、鷹子はずるずると裏口へと引きずられていく。

裏口から寺内に入ったところでようやく拘束を解いてもらえた。

鷹子は自分の口を塞いだ人物を睨みつける。太眉の僧侶だった。

「何すんのっ」

「おまえの、うるさい口が邪魔だったのだ」

「何それ」

裏口には僧侶達が全員集まっていた。椿もいる。おかしい光景に、鷹子は目を瞬かせた。

僧侶達の説明はこうだ。則宗が寺に訪ねて来たと思ったら、椿を出せと言ってきた。椿はお尋ね者なのだ、と。しかし、驚幸はそれを拒否。椿を匿うように坊主達に指示して自分が矢面に立ったとい

う。

鶯幸と則宗の言い合いが聞こえる。鷹子は居たたまれなくなつてそちらへ近づいた。鷹子の後に椿が続く。

「おいおい、お前らが出て行こうとしてどうするよ」

僧侶達は慌てて二人を追った。

ひたと壁に寄り、鷹子は鶯幸達を覗き見た。死角になっているため、鶯幸達からこちらが見えることはないだろう。

「だから、何度も言っているだろう。椿はお尋ね者なんだ。領主様へ突き出さなければならぬ」

則宗は苛立つた口調でまくし立てる。鷹子の隣にいた椿が息を呑んだ。

「……本当に、それが理由でしょうか」

「は？」

「それは建前で、本当はこれ以上、鷹子が他の誰かに心を開くのは嫌だからではないのですか？」

「何だと……」

眉をひそめる則宗に、鶯幸は笑みを消して唇を動かした。

「私は知っていますよ。あなたは鷹子の父君が殺されたあの日……嘉納家にいた。そして、彼女の父親が殺されそうになっているのをわざと見て見ぬふりした」

「それは、仕方なかったんだ。鷹子の父上はわたしの父を害そうと

――」

「鷹子の父君は無実でした」

鷹子は、ひゅつと息を吸い込んだ。

「わけもわからず暗殺の犯人役に仕立て上げられ、殺された」

鶯幸と則宗以外の誰もが、ごくりと生唾を呑む。

「何を根拠にそんな戯れ言を」

ふつと鶯幸は笑んだ。

「おや、そのあと父君を殺そうとした真犯人を闇に葬ったのは他の誰でもない、あなたでしょう？ ……あなたは犯人を知りつつ、そ

れを故意的に隠蔽し、嘘を吐いた。鷹子の父が犯人だ、と」

あ……と則宗が一步後退する。

「私のこの目は何も映せません。ですが、無念のうちに死した魂に触れることは出来ます。……もちろん、きちんとした証拠などないですから、何一つ立証することは叶いせんが」

「……………」

驚幸の言葉に則宗は齒を軋ませた。

「鷹子の父君が死ねば、もとより心が弱い彼女の母君は床に伏す。そうしたら自分一人が鷹子のよりどころになれるとも思っただけでしょう？」

「驚幸……きさま……」

「則宗殿。これ以上、鷹子から何も奪うことなどさせません」
ぴしゃりと驚幸は言い放った。

「あなたの世俗にまみれた卑劣な所有欲に、この寺の者を巻き込まないで頂きたい」

「黙れ！」

頭に血がのぼったのだろう。則宗は盲目の驚幸を足蹴にし、郎従達を振り向いた。

「おまえ達、何をぼかんと見ておるのだ！ 椿を庇う者も罪人……やれっ」

則宗は郎従に喚いた。

「は、はいっ」

呆けていた郎従達は一斉に驚幸を取り囲み、手加減なしに蹴りたくる。

「驚幸様！」

「くそ、おまえたち何をする！」

我慢ならなくなった幾人かの僧侶が錫杖を振り回して飛び出した。「下がちなさい。約束したでしょう。もう二度と、その手を血で塗らさぬと」

鋭い声で、驚幸は彼らを制す。則宗は鼻の頭に皺を寄せると、「

そのまま続けろ」と郎従に命令を下した。郎従達は蹴るだけにとどまらず、刀の鞘で鶯幸を殴打する。僧侶達はぶるぶると体を震わせて場に立ち尽くしていた。

「やめて！」

鷹子は意を決して進み出た。鷹子、と鶯幸は小さく呟く。則宗は鷹子の前に立った。

「……鶯幸の言ったことは全て嘘だよ。戒律を破って嘘を吐くなんて、とんだくされ坊主め。………ねえ、鷹子」

猫撫で声で呼びかけられた鷹子は、びくりと肩を跳ね上げた。

「おまえは可哀想な子だね。嘘つき坊主と逃亡中の武士や僧兵崩れに囲まれて」

「そんなことない！」

勢い込んで喰ってかかる鷹子に、則宗は目を細めた。

「そう……じゃあ鷹子も、わたしがおまえの父を見殺しにしたと言うんだね」

「それは——」

則宗は手を上げ、鷹子へ振り下ろす。鷹子はぎゅっと目を瞑った。頬に激痛が走り、そのまま体が宙に浮いた。木にとまっていた鳥達が舞い上がる。鷹子は砂利の上に崩れ落ちた。

「——っ」

「よせ、椿」

鷹子のところへ行こうとする椿を、太眉の僧侶を筆頭に数人の僧侶が羽交い締めにして止める。

椿は生まれて初めて、身のうちから湧き上がってくる戦慄を感じた。

則宗から思いきりぶたれた左頬を押さえて鷹子は齒をかちかちと鳴らす。則宗は鷹子の視線に合わせるように屈んだ。

「おまえが昔のように、わたしだけを見ていればこんなことにはならなかったのに。——少なくとも、死ぬのはおまえの父と母だけで済んだのにね」

則宗は鷹子の耳元で呟いた。

「知っている？ 裏切り者は、全て失ってしまうものだよ」

鷹子の顔が見る見るうちに真っ青になる。彼女は今にも息を止めてしまいそうだった。

椿は僧侶達の拘束を引きちぎると、殺気をみなぎらせて地面を蹴った。

「——その手を放せ」

殺気を含ませ、鷹子の頬を撫でる則宗の手首を掴む。椿と則宗の視線が交錯した。ふっと則宗は嗤う。

「おとなしく、おまえがわたしについてくれば考えてやってもいい」

「……馬鹿が」

椿と則宗は一步も譲らず睨み合った。

「やめてって言うてるでしょ！」

鷹子が悲鳴のような声を上げた。

「あたしは則宗様を裏切ってなんかいません……っ。だからもうこれ以上、鶯幸様にも椿様にも手出しをしないでっ」

必死な形相で鷹子は言った。則宗は、ちっと舌を鳴らす。

「今日はいったん引く。交渉は決裂だ」

そう言って彼は踵を返した。椿は太刀を抜こうとしたが、僧侶達から止められる。

「椿、ここは我慢しろ」

「くそ……」

則宗は足を止め、椿を横目見た。

「椿、ね。言い得て妙だな」

「なんだと？」

「おや、忘れたかい。おまえの家には数多の椿が咲き誇っていたじゃないか。首からぱとりと落ちる、おまえの家人の如き潔い花が」
椿の動きが止まった。

「——おまえ、消息不明となつていことほりる琴堀家当主の五男だろう。調べてみて驚いたよ」

「……………」

「琴堀の当主はうつけ者だった……………おまえは違つたようだけど。わたしを信用するなという文を何度も送りつけていたもんな」

くすりと則宗は笑う。鷹子を含めた全員が椿と則宗に注目している。

「間者であるわたしをほいほい信じてくれるものだから、仕事がかどり過ぎて拍子抜けしたくらいだ。ああ、最期に礼を言つてやれば良かったかな。私の役目は琴堀の内情を密告することだったから、夜襲には参加していないもので」

椿は抑えつけていた怒りが焼き切れるのを感じた。下唇を噛みしめる。ぷつりと皮が裂け、血が滴った。

「貴様……恥を知れ」

「おお、怖い怖い」

則宗は白々しく腕をさすると、馬へ飛び乗った。

「——足利俊綱様にはおまえの存在を知らせてある。源氏に与する琴堀の者は一人残らず根絶やしにすることだ。……せいぜい、追つ手が来るまで生を謳歌するがいいさ」

そう言い捨てて則宗は去つて行く。鷹子はよろよると立ち上ると、物言いたげに椿を見つめた。彼はその視線を黙殺した。

「驚幸様ーっ」

「お気を確かにつ」

僧侶達は涙声を上げながら、驚幸を寺内へ担ぎ込んだ。

鶯幸を部屋に運び入れた僧侶達は、鶯幸の体中に血止めの薬を塗布し、傷口に清潔な布地を当てた。命に別状はなく、僧侶達は安堵の溜め息を洩らす。

逢魔が刻がやって来る頃まで、鶯幸は目を覚まさなかった。ようやく目を覚ましたと思ったら、彼は鷹子に手を伸ばす。

「鷹子が無事で、良かった……」

いつも凜として鷹子を見守ってくれていた鶯幸の弱々しい姿を前にし、鷹子は後ずさった。彼女は両手で口を覆う。

「また、あたしのせいだ……おっとうも、おっかあも、鶯幸様も。」

……あたしのせいで……」

「おい」

椿の制止も聞かず、鷹子は滂沱の涙を流して外へ飛び出した。闇雲に走って辿り着いたのは、紅椿の連理木が根ざす場所だった。鷹子は木の根元に膝を抱いて座り、俯いた。いつもなら可愛らしいと思う夜鳥の声さえ恐ろしい。暗闇も、オオカミも、野犬も。何もかも恐ろしく感じたが、それ以上に自分が恐ろしかった。

「……………勝手に外へ出るな」

不機嫌な声が頭上に降り注いだ。顔を上げれば、そこには端正な面立ちをした青年がいた。鷹子は膝小僧を抱えてそっぽを向く。

椿は溜め息を吐き、鷹子の横に腰を下ろした。

「鶯幸が怪我を負ったのは、お前のせいじゃない。俺のせいだ」

「……………ううん、きっと……あたしのせい」

「何を言っている」

「だって、おっとうもおっかあも、あたしのせいで……」

鷹子の背が小刻みに揺れる。夕月が雲に隠れ、闇が訪れた。

凍えるように寒い日の昼下がり。雪が降り積もり、道の大半を覆っている。

『ちよつくら嘉納様のところ行ってくる』

『え、どうして？ おつとうがどうして加納様のところに呼ばれるの？』

『おれに話があるんだと。ま、大丈夫だろ。鷹子は、おつかあとちやんと留守番しとけ』

『あたしもついて行く。則宗様と最近会ってないもん』

『駄目だ、駄目だ。重要な話って言ってたから、子供のお前を連れて行ったらおつとうが怒られちまう』

駄々をこねる鷹子を父親は笑っていなして出かけて行つた。

『鷹子、どこ行くの？』

『ちよつとそこまで』

訝しがる母親を家に残し、鷹子はしつかり笠を着込んで家を出た。いつも野良仕事をしているから足腰には自信がある。山の一つ越えた先にある嘉納家に行くことなどわけなかった。雪崩れを起こしそうな場所は避けながら、鷹子は父親の後を追った。

嘉納家の門番がちよつと目を離れた隙に邸内へ侵入する。何やら言い争いが聞こえてきた。庭から回り、声のする部屋の障子を少しばかり開く。すると、どうだ。父親が複数の男達に取り囲まれてうずくまっているではないか。

『やめてっ』

鷹子は駆け寄り、父親に覆い被さった。

『おつとうを傷つけないでっ』

恐怖心を押し殺し、少女は叫んだ。

『ははっ、ゴン太よ。助けに来たのが餓鬼だなんて、貴様もつくづ

く運がないな』

『おい、娘っこ。そんなひよろっこい腕でオレ達に勝てると思ってるのか?』

鷹子は首根っこを捕まれるも、父親から離れようとしなない。

『則宗様、則宗様……いないの? 助けて!』

鷹子は年長の遊び相手の名を呼んだ。

『則宗は来ぬよ』

嘉納家当主はそう言い、気だるげに酒を回し飲み舌なめずりした。

『やれ』

『はいっ、嘉納さま』

酒杯を掲げながら宴を楽しんでいる嘉納家当主は嗤った。鷹子の瞳に、めくれ上がった唇が映る。

刀が振り下ろされた。鷹子は両腕で頭を庇う。

『助けて、おっとう!』

肉を裂く音がした。鷹子は薄目を開け、絶句した。自分の上に覆い被さった父親の背中に、深々と刀が刺さっている。

『おやおや、脅しのつもりだったのに、馬鹿な男だ』

嘲笑が室内に充満する。

『に……げろ……』

父親は渾身の力で自分の体を持ち上げる。鷹子はそこから這い出した。

それからどうやって逃げたかは覚えていない。足を止めたら殺されると思つて必死で走った。

しばらくして、気を失つて雪の中で倒れている鷹子を母親が見つけてくれた。

『あたしのせいだ……あたしが、助けてなんて言っちゃったから、おっとうが……っ』

血濡れた手を握りしめて、母親の胸に抱かれて鷹子は泣きに泣いた。

母親は全て悟つたのだらう。彼女もまた、泣き崩れた。

やがて、母は何も食べなくなって床に伏せ——静かに息を引き取った。

ひとしきり話し終えた鷹子は息を吐いた。

「……ここに来る度、『もう誰も失いたくありませんように』って何度も星に願ってたの。あたしみたいな子がそんなこと願ったから神様が怒って——鶯幸様もっ」

鷹子は奥歯を食いしばり、地面を叩いた。

「おつとを犠牲にして、見捨てて……あたしは逃げた。絶対に許されない」

何度も神仏へ祈りを捧げた彼女の手は、痛ましいほど震えていた。椿の手が鷹子の背に回る。椿は自らの腕の中に鷹子を引き寄せた。たくましい胸板の下から心音が聞こえる。

「……俺がお前を許す」

低く落ち着いた声が、鷹子の涙をさらった。

「お前は何も悪くない。思いきり泣いて、そのあと笑え」

——同じ。鷹子がこの前、椿に言ったことと同じことを、椿が言っている。思わず椿を見上げると、彼は思いがけず柔らかな笑顔をくれた。唇が半弧を描いている。

「そうだろ、鷹子」

初めて呼ばれた自分の名前。それは鷹子の胸にじわりと滲み、広がった。椿が鷹子の髪を、ごつごつした手で撫でる。鷹子は我慢出来ず、声を上げて泣いた。

翌夕、目を腫らした鷹子は村にいた。オオカミに噛まれた村人へ塗り薬を渡すためだ。

「鷹子」

そこに則宗とその郎従が現れる。鷹子は彼を無視し、足早に郷愁寺へ戻るうとする。

「待って」

「放、して！」

則宗に掴まれた手首を捻った。

「おまえがわたしの家へ来るなら、椿のことは人違いだったと足利様にお伝えする」

ぴくりと鷹子の反抗が止む。畳みかけるように則宗は言う。

「寺の坊主達へ手出しもしない。約束しよう」

「……………嘘」

「本当だよ。わたしが望むのは、おまえだけだ」

鷹子はじつと則宗の顔を見つめる。嘘を吐いている様子はない。

彼女は唾を嚥下した。

「……………わかりました」

則宗は鷹揚に頷く。

「それでいい。それでいいんだよ、鷹子」

「お寺の皆に、ちゃんとあたしが自分の意思で嘉納家へ行つたと伝えて下さい」

「もちろんだ。…………お前達」

「はっ。貴様、聞いていたな。郷愁寺へ行つて、その旨を伝えてこい」

郎従は近くにいた村人を捕まえてそう言った。

「え、でも…………あの山にのぼるんでしょう？ それはちょっと…………」

「つべこべ言わずに行け！ 斬りたいか！」

ひい、と村人は持っていた鍬を取り落とし、一目散に山へ駆け出した。

「行くのですか」

鶯幸は羽織を肩にかけて起き上がった。

ああ、と椿は太刀を磨きながら答える。

「……あいつの名を聞いた時から、こうすることは決めていた」
「大変です！」

鶯幸の部屋に、太眉の僧侶が飛び込んできた。

「どうしたのです、騒がしい……」

「鷹子が、鷹子が嘉納家に行ったらしいです！」

椿と鶯幸の顔色が変わる。

「連れ去られたのか？」

椿が訊くと、僧侶は首を横に振った。

「いや、言付けを頼まれた村人が言うには、鷹子自らついて行った
とのこと。しかし——」

「その村人に詳しい事情を聞きます。その方は？」

「それが、言付けを伝え終わると脱兎の如く山を下りてしまいました
て」

僧侶が頭を掻く。

「村へ行ってくる」

椿は太刀を腰にぶらさげて胡座を崩した。

「私も行きます」

「しかし、鶯幸さま。傷が……」

「——……もう平気です。連れて行って下さい」

「鶯幸さま……。わかりました」

太眉の僧侶は鶯幸に肩を貸し、椿の後に続いた。

「知るものか」

言付けを預かった村人は開口一番そう言った。

「鷹子のような鬼っ子のことなど、わしらは一切関知せん」

「おれたちはただ、鷹子が本当に望んで嘉納家に行ったのか訊きたいだけで——」

太眉の僧侶が言うと、村人は嘲笑を洩らした。

「はっ、望んで行ったかそうでないかなど、構うものか。のう、皆の者」

村人の言葉に他の者達は首肯する。

「呪われた寺に居着く鷹子がどうなったところで心も痛まんわ」
「な……………っ」

僧侶のこめかみに青筋が浮かぶ。椿が一言もの申そうとした、その時。

「いい加減になさい！」

怒声が飛んだ。皆、ぽかんとした顔で声の主——驚幸を見る。彼は見えないはずの目を開いた。その灰色の瞳は虚空を見つめている。
「あなた達の命を、どれだけ鷹子が救ったか……ご存じですか」
「え？」

「真実を見ようとせず変化を厭うあなた達に、私が好きこのんで薬湯を煎じているとも思っていたんですか」

村人達は顔を見合わせる。

「神に感謝もしないばかりか、人としての礼さえ欠くあなた達になど、薬を渡したくなかった。でも、鷹子が必死に頼んできたんです。あなた達を憎みもせず、手を差し伸べたあの子に対してその態度——っ」

驚幸の怒りは止まない。

「私が山を呪った？ 馬鹿な。私は郷愁山の神をきちんと祀ってあげただけ。あなた達が山に対する感謝を忘れていたから、郷愁山は荒れていたのですよ」

驚幸の虚空を見る灰色の双眸が潤んだ。

「真実を知ってもなお——鷹子など知らぬと言うのですか」

村人達は罰の悪そうな顔をして黙り込んだ。

椿は太刀の柄を握りしめ、おい、と村人に声をかける。彼らは喉を引きつらせたような声を上げた。

「馬を貸せ」

「かしこまりましたっ」

うわずった声で村人達は答えた。

「おれも行くぜ。待つてろ、すぐ他のやつらも呼んでくるから」

驚幸を支えつつ、僧侶は意気込んだ。

「来なくて良い。もう二度とその手を血に染めぬと誓ったのだろう？」

「それは——だが——」

椿は親指の腹で唇を拭った。

「……夜明けに嘉納家へ鷹子を迎えに来い。それまでに全てを終わらせておく」

「あいわかった！ さあ、驚幸さま……いったん寺へ戻りましょう」

「椿殿。鷹子を、お願いします」

驚幸が頭を下げる。椿は力強く頷いた。

「嘉納則宗。——決着をつけてやる」

決意を秘めた瞳でそう呟き、椿は夕陽を睨んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0918z/>

連理木の下で～澄明の空～

2011年12月3日20時57分発行